

アメリカにおける永井荷風と「仏蘭西」への憧憬

福 永 勝 也

1. 『あめりか物語』と『ふらんす物語』への旅

明治屈指の文人でありながら、陸軍の高級官僚として権力機構に組み込まれていた森鷗外は、西洋的近代国家を目指す明治政府の政策を、「普請中の日本に必要な施策」として是認する姿勢を示した。また、西洋に対するコンプレックスと「イギリス嫌い」で知られる夏目漱石も、留学から帰国した後は「日本の外発的開化は致し方ない」と事実上、容認する見解を表明している。つまり、2人とも欧米留学を通じて、世界の最先端を走る欧米列強の激しい鏝^{つば}迫り合いを目の当たりにしてきただけに、江戸時代の旧弊を色濃く残した日本の微温的な国際感覚とその対外政策を深く憂慮していた。その結果、国家的主体性の欠如を覚悟したうえで、このような現実的判断を下したのである。

それに対し、鷗外や漱石と同様、明治を代表する国際的文人だった永井荷風(名は壮吉、本稿では「荷風」で統一)は徹底した芸術至上主義と個人主義、さらに江戸文化を高く評価していたが故に、政府が強力に推進する西洋化路線を「猿真似」「俗悪」「醜悪」と口を極めて罵倒する。日本が誇る歴史や伝統、さらに日本人としての矜持^{きやうじ}を忘れて、西洋に靡^{なび}く自律性のない無様な姿勢に憤激したのである。

鷗外の場合、富国強兵路線を主導する陸軍に所属していたという事情もあったが、差し迫った国際情勢を鑑みると、取り敢えず早急に西洋化を推進し、その後で「西洋」の日本化を進めれば良いと考えていた。徹底した「嫌英」の漱石も同様で、個人的には西洋化路線に異論を持っていたが、

当時の緊迫した世界情勢と、日本に近代化を推進する十分な能力がないことから、西洋という外的圧力(「ガイアツ」)によって近代化を図るのが現実的な選択肢という結論に達した。

このような平衡感覚に立脚した現実論者である両巨頭に真っ向から対峙したのが荷風で、彼は妥協の産物としての西洋化を痛烈に非難する。そして、そのような過激な姿勢が国家権力にとって危険分子と映ったのか、欧米遊学から帰国した後、荷風はまず『あめりか物語』を発表し、その後に『ふらんす物語』を刊行しようとしたが、当局から公序良俗を乱すとして発禁処分^{おもん}にされる憂き目に遭う。

政府公認のエリート国費留学生として欧州に派遣された鷗外や漱石と違って、荷風は父親の私的援助があったとはいえ、国とはまったく無縁の私費による欧米遊学だったため、国家に阿^{おもね}る理由はまったくなかった。それに加えて、荷風自身が名家の御曹司であるにも拘わらず、吉原通いや歌舞音曲、落語などに現^{うつ}を抜かす風流人で、生来、権威主義を毛嫌^{うつつ}いする自由奔放な高等遊民だったこととも無縁ではなかった。

そんな荷風の欧米滞在は1903年(明治36)から08年(明治41)年にかけて4年7ヵ月間に及び、その内訳はアメリカ3年9ヵ月、フランス10ヵ月間だった。それは荷風23歳から28歳のことで、この異国体験が彼の人間形成だけでなく、後の荷風文学に決定的な影響を与えることになる。

この欧米放浪によって荷風はフランス文学の息吹に触れ、芸術至上主義の真髄に遭遇する。そして、それらの体験を通して、ロマンティズムやエロティシズム、デカダンスへと傾倒していくのである。この過程において見逃せないのは、荷風が新奇性に富んだこれら芸術文化の深奥に歴史と伝統に培われた「クラシック」がしっかりと根を張^{ちしつ}っていることを知悉したことである。

それ故、荷風は日本が自国の歴史や伝統文化を蔑^{ないがし}ろにして、安易に西洋化政策を導入することに異議を申し立てたのである。荷風は「フランス人でないのが己^{おのれ}の最大の不幸」と嘆くほどフランス熱に浮かれていたが、こ

のような背景もあって、帰国後は西洋への憧憬とは真逆の浮世絵や歌舞伎に代表される日本の伝統文化、とりわけ江戸情緒文化に耽溺していく。

荷風は何ものにも束縛されない自由人、いわばデラシネのように、青春期にアメリカとフランスで人生の放浪を重ねる。そして、新進作家としての鋭い眼差しで経済大国のアメリカと、芸術文化大国であるフランスを仔細に観察し、その深層を扶^{たす}る機会に恵まれる。それらは日誌として記録され、さらに帰国直後には書き溜めた原稿が『あめりか物語』として刊行される。

それに続いて『ふらんす物語』(当初、発禁処分)も世に問うが、いずれもこれまでにない斬新な新帰朝者作品として絶賛され、爆発的な人気を呼ぶ。そして、これが契機となって、荷風は慶應義塾の文学部教授に就任し、さらに明治から大正、昭和にかけて日本文壇に確固たる地歩を占める文豪となるのである。

帰国後、荷風を一躍、文壇の寵児ならしめたこの『あめりか物語』と『ふらんす物語』は、いずれも異国における実体験に基づいた紀行文と評論、さらに随所に仮構を散りばめた短編小説で構成されている。とりわけ後者の作品は、リヨンやパリにおける高等遊民的なエトランゼ体験と、彼の内なる文学世界を支配していた“ふらんす”に対する夢想を巧みに融合させ、読者の心を魅了する華麗な物語に仕上げている。その一端は、次のような流麗な「パリ礼讃」となって表現されている。

「あゝ！ パリー！ 自分は如何なる感に打たれたであらうか！ 有名なコンコルドの広場から、並木の大通シヤンゼルゼー、凱旋門、ブーロンユの森は云ふに及ばず、リボリの街の賑ひ、イタリヤ四辻の雑沓から、さては、セインの河岸通り、又は名も知れぬ細い露地の様に至るまで、自分は、見る処、到る処に、つく／＼此れまで読んだフランス写実派の小説と、パルナツス派の詩篇とが、如何に忠実に、如何に精細に、此の大都の生活を写して居るか、と云う事を感じ入るのであつた⁽¹⁾」。

このようなフランスに対する抒情的讚美は、その華麗さにおいて荷風の右に出る者はいないだろう。それほどフランスへの傾倒と心酔、さらにそれに自己を同一化させる強いパッションがあったわけで、その文学的核心を成していたのがボードレールのデカダンスや、荷風が文学の師と仰いだモーパッサンの自然主義だった。

荷風は勉学にあまり関心を示さず、吉原通いや芸能、芸術、文学といった世界に興味を抱く風流人だったため、高級官僚だった父、久一郎にとっては“放蕩息子”以外の何者でもなかった。しかも、荷風は由緒ある永井家の跡取りであったため、その前途に危惧を抱いた久一郎がその“悪弊”^{ビジ}を断ち切らせるために、経済先進国であるアメリカに送り込み、そこで実^{ネス}学を学ばせようと考えたのである。

その意味において、荷風の「アメリカ行」は鷗外や漱石の国費留学とは根本的に異なる“金持ち坊ちゃん”の勝手気儘な遊学だった。しかし、その提案に乗ったものの、荷風はアメリカで実学を勉強するつもりは毛頭なかった。日本を脱出して、憧れのフランスに一步でも近づけるのなら、アメリカでも何処でも良かったのである。つまり、荷風にとってアメリカはフランスに渡る通過点に過ぎなかったわけで、その点において荷風は父親の親心を巧みに利用し、欺いたともいえる。

このようにして、荷風は自身の底意と父親の迷惑との齟齬^{そご}を巧妙にカムフラージュして、父祖伝来の地を脱出することに成功する。しかし、4年7ヵ月にわたるアメリカ、フランス滞在中、終始、荷風の脳裏に去来し続けたのが、父、久一郎への恩義とそれを裏切ったことに対する後ろめたさだったことは皮肉としかいえない。

つまり、永井家の家督を継ぐという重責を担った長子としての荷風、その息子に出来る限りの尽力を試みる久一郎との父子関係に加え、明治初期のエリート官僚だった久一郎の権威主義的な人生観とそれを忌み嫌うボヘミアンとしての荷風の反発——そのような複雑かつ重層的な相関関係の中に彼の洋行は位置づけられるのである。

2. 鷗外、ゾラとの出会いと官僚的な父親との葛藤

荷風は1879年(明治12)12月3日、永井久一郎の長男として東京に生を受ける。その父は出身地、尾張藩の筆頭儒者、鷲津毅堂の薫陶を受け、国際派の官僚でありながら漢詩人としても名を成し、毅堂の次女、恆^{つね}を娶^{めと}る。その恆が荷風の母である。熱病の如くフランスに憧れ、その虜^{とりこ}になったにも拘わらず、荷風文学の深奥に儒学が息づいていたのは、この外祖父の系譜があったからに他ならない。

久一郎は若い頃、慶應義塾で福沢諭吉の指導を受け、その後、大学南校を経て1871年(明治4)から2年間、名古屋(尾張)藩の命令でアメリカのプリンストン大学に留学する。帰国した後は帝国大学書記官、文部省大臣官房秘書官や同省会計局長などを歴任する。鷗外がドイツに留学した1884年(明治17)には、ロンドン万国衛生博覧会事務取扱としてイギリスに派遣されている。またその翌年には、ローマで開催された国際衛生会議に日本代表として出席している。

つまり、明治初期におけるアメリカ帰りの国際派エリート官僚だったわけで、そのことは家庭におけるライフスタイルにも反映されている。東京の自宅で久一郎は常に背広を着用し、食事はテーブルで、しかも洋食が中心だった。それが永井家の家風であるから、幼少の荷風が洋服を着せられ、それに倣^{なら}ったことはいうまでもない。

そして、11歳になった荷風は、久一郎の勧めで東京英語学校に通い始める。しかし、父親の目に余る“アメリカ被^{かぶ}れ”と高慢なエリート官僚意識に反発したのか、まもなく英語の勉強を断念している。

青春期における荷風の興味の対象は文学の領域にとどまらず、大衆芸能や歌舞伎などの古典芸能、さらに音楽や美術など芸術分野全般にわたっており、17歳になると荒木竹翁から尺八を習い始める。さらにその翌年、美術学校への進学を希望するが、父、久一郎はそれを一喝して断念させてい

る。

元官僚だった久一郎の社会に対する価値基準の根幹は権力重視で、その具体例として一高―帝大への進学に象徴される高学歴、高級官僚、さらに閥閥や財閥、財力といった世俗的なものだった。そのような社会観を絶対的と信じていた久一郎にとって、荷風がこよなく愛する大衆芸能や音楽、美術、文学といった領域は評価の対象外で、しかも得体が知れない、信用できないものと映った。

父親に美術への道を拒絶されたことが影響したのか、荷風は久一郎に対する反発をいっそう強め、この頃から吉原通いを始めて女淫^{ふけ}に耽るようになる。彼の生涯を彩る止めどなき女漁の源流がここにあるわけだが、これら娼婦や芸者たちとの艶やかな交情を^{えいだつ}頼脱な名文によって荷風文学にまで高めるのだから、人生、何が幸いするか分からない。

しかし、久一郎の一流志向は衰える兆しを見せず、1897年(明治30)6月、荷風は当代随一のエリート登竜門である第一高等学校の受験を強要される。荷風を一高から東京帝国大学に進学させようと考えていたに違いないが、勉学とは無縁の放蕩三昧の日々を送っていた荷風に十分な学力があるはずはなく、敢えなく不合格となる。

その年、久一郎は退官して日本郵船に天下り、上海支店長に就任している。一方、一高入試に失敗した荷風は落胆する気配もなく、相変わらず趣味に生きる日々を過ごしていたが、父親の勧めもあって母親たちと一緒に上海に渡る。大陸を一度見てみようといった程度の渡航動機だったが、荷風はまもなく帰国して、東京の高等商業学校附属外国語学校清語科に入学している。果たして、本気で中国語を学ぶつもりがあったのかどうか、その動機は定かではない。

このように、荷風の人生を左右する座標軸は、常に父、久一郎の意志に従って目まぐるしく揺れ続ける。多趣味で何事にも興味を示す風流人といってしまうえばそれまでだが、案の定、この外語学校(清語科)も早々に不登校を決め込んでしまう。卓越した語学の才能を持っていた荷風が本当に清

語に関心があれば、こんなに短期間で勉学を放棄するはずはなく、これも父親の差し金だった可能性が強い。

この頃、荷風は文学に傾倒し始めており、翌1898年(明治31)、自作『簾の月』を携えて文士、広津柳浪を訪ね、その門下生になっている。多情多感な荷風の行動は止まるところを知らず、その翌年、今度は落語家の朝寝坊むらく(永瀬徳久)に弟子入りし、三遊亭夢之助を名乗っている。

このように、一向に人生の方向性が定まらない荷風の破天荒な行状に、父親は怒り心頭だったと思われるが、久一郎は翌年2月、横浜支店長に栄転して帰国する。当然、荷風に対する監視は強まることになるが、荷風はどこ吹く風で、依然として風来坊のような生活を続け、その年の6月、今度は心酔していた歌舞伎座の立作者、福地桜痴(源一郎)の門下となる。つまり、狂言作者見習になったわけで、以来、毎日のように歌舞伎座に出入りするのである(この年、夏目漱石がイギリスに留学している)。

当時、荷風が関心を示していた文学の世界では、フランスのエミール・ゾラが自然主義の旗手として一世を風靡^{ふうび}していた。封建的要素の強い旧道徳や権威主義、さらに既成の倫理観を舌鋒鋭く批判するゾラの姿勢に、荷風は強く惹かれ、その熱心な共鳴者となる。当然のことながら、そこに家父長的権力を振るう父親への反発があったことは想像に難くない。

このように社会的権力に歯向かうゾラに傾倒した荷風は1901年(明治34)9月、今度は確固たる文学的動機を抱いて暁星学校フランス語科(夜学)に通い始める。最初に通った英語学校から清語、そしてフランス語へと荷風の語学遍歴は目まぐるしいが、それまでの2例が父親の指示に従ったのに対し、今度のフランス語は自身の主体的な選択だった。

その動機となったのがゾライズムへの傾倒だったわけだが、そのゾラ作品の中でも荷風はとりわけ『大地』と『恋の一頁』に魅了されている。それを契機に荷風のフランス文学熱はいっそう強まり、上田敏の名訳で知られるボードレールやモーパッサンへとその興味の対象は拡大されていく。

そして、パリにおいてゾラがガス中毒死した1902年(明治35)、荷風は

『野心』『ゾラ氏の故郷』『地獄の花』といった作品を相次いで発表する。さらに、雑誌「饒舌」にゾラの紹介文を発表し、翌年には3ヵ月間にわたって大阪毎日新聞にゾラの小説『獣人』の翻訳『恋と刃』を連載している。

荷風は鷗外の『即興詩人』を読んで西洋文学に目覚めたとされるが、上記の作品を発表した直後、市村座でその鷗外と初めて顔を合わせている。その際、鷗外から「君の『地獄の花』を読ませてもらったよ」と褒め言葉を掛けてもらい、「かくの如き歓喜と光榮に打たれることなし」と感激する。

このように、永井家の跡取り息子だった荷風は、小説や落語、尺八、歌舞伎、そして美術などに心を奪われ、吉原通いにも現を抜かす高等風來坊のような生き方をしていたが、これらの作品発表を機に、その人生はようやく「文学の世界」へと収斂^{とりのこ}し始める。

しかし、官僚的発想の虜^{とりこ}になっている久一郎は、荷風が希求してやまない「小説家」という職業に理解を示したり、それを容認することはなかった。そんな海のものとも山のものとも知れない危うい人生より、自分がかつて留学していたアメリカに荷風を送り込み、そこで実学^{ビジネス}を勉強させる方が得策と考える。帰国した後は、自身のいる日本郵船にでも就職させて、永井家を継がせようと考えていたのかもしれない。

しかし、荷風の人生はすでに文学を抜きにしては考えられず、その点において久一郎との隔絶^{とりのこ}は決定的なものになっていた。ところが、ここが荷風の狡猾なところで、実学を勉強するつもりは毛頭ないが、父親の指示に従ったフリをしてアメリカに渡ってしまえば、何とでも理由をつけてフランスに行くことは難しくないと考えて策を練る。

そのような下心をひた隠しにして、荷風はアメリカ遊学を承諾するが、父親からの金銭的援助や様々なサポートがある限り、荷風は常に久一郎の庇護の下、つまり支配下に置かれることになる。後の世に文豪として威風堂々の権力批判を展開した荷風であるが、このアメリカ、フランス滞在中に限っては、父親に頭が上がらない“ひ弱なお坊ちゃん”のような存在に

終始する。他方、そのエリートとしての経歴ゆえ、家庭において常に強権的だった久一郎にしても、意に沿わぬ放蕩息子の荷風が異国で苦勞していることを知ると、すぐさま救援の手を差し伸べ、その独りよがりな願いをできるだけ叶えてやるという親馬鹿ぶりを發揮している。

3. 不本意なアメリカ滞在とモーパッサンへの傾倒

1903年(明治36)9月22日、荷風は日本郵船「信濃丸」で横浜港を出航し、以後4年7ヵ月にわたるアメリカ・フランス行がスタートする。この「信濃丸」は久一郎が横浜支店長を務める日本郵船所有の船舶の中でも最高級の豪華客船で、政府高官や企業の役員クラスが利用する一等船室と外国に出張する役人や企業社員たちが利用する二等船室、そして主として留学生や出稼ぎ労働者たちが利用する三等船室に分かれていた。本来なら三等船客がふさわしい荷風だが、日本郵船の支店長だった父親の計らいで、上陸の際の検疫や入国審査が簡略化される特権付きの一等船室が当てがわれた。

太平洋を横断した「信濃丸」はいったんカナダのヴィクトリア港に寄港した後、10月7日に目的地であるアメリカ・シアトル港に入港する。記念すべきアメリカ初上陸ということになるが、奇妙なことに荷風はその時の状況を日誌に書き残していない。

本来、登場して然るべき『あめりか物語』冒頭の『船室夜話』、さらに帰国後、春陽堂から刊行された『荷風全集』第二巻収録の『西遊日誌抄』や外遊時代の日録メモ『西遊日誌稿』にもまったく記述が見当たらない。荷風の行動を知るうえでもっとも必要な備忘録である『西遊日誌抄』では、上陸の際の空白の後、12日も経過してから、次の滞在地タコマ市街の情景描写が登場している⁽²⁾。このような「アメリカ」に対する素っ気なさは、荷風が大西洋を渡ってフランス・ルアーブル港に到着した際の感極まった記述と比較しても、実に対照的なのである。

シアトルに上陸した際、荷風はこの先進経済大国の立派な街並みやそこ

に暮らす人々の豊かな生活ぶり、さらに島国日本とは比較にならないアメリカ大陸の広大な自然に目を見張ったに違いない。しかし、それらに対する反応を悉く封印し、黙殺したわけで、このことは荷風のアメリカに対する気持ち^{ことごと}が、最初からいかに冷めていたかを物語っている。

前述の通り、荷風はシアトル上陸後、その近郊にある人口6万のタコマ市に移動する。久一郎の知人(日本人)が当地で会社を営んでおり、荷風は同家に寄宿して、そこからハイスクールに通い始める。この地には早くから日本人移民が入植しており、日本領事館もシアトルより先に開設されていた。そして荷風は翌1904年(明治37)5月、この日本人宅からアメリカ人の家に居を移している。

その年の10月にはセント・ルイスで開催中の万国博覧会を見学し、この国の科学技術の粋を目の当たりにして驚愕している。結局、タコマに約1年間滞在した後、1904年11月22日、ミシガン州のカラマズーに移る。アメリカでも、中西部(ミッドウエスト)の冬の厳しい気候は定評があるが、荷風は当地における晩秋の夜の寒さに早くも音を上げています。「此地は寒気^{はなはだ}甚しく夜は殆ど骨も凍るかと思はるゝばかりなり」⁽³⁾。

ここに移って来た目的は、カラマズーカレッジの聴講生になるため、荷風はこの大学で英文学とフランス語講座を聴講する。タコマと違ってこの地に日本人はほとんどおらず、「ここまで来ると日本人に会うこともないだろう」と安堵していることから、嫌人癖や孤独癖のある荷風がタコマにおける日本人社会に嫌気が差していたと思われる。

この地での生活は、荷風が希求していた心穏やかなものだった。大学では希望に胸を膨らませながら熱心にフランス語を学び、宿舎に戻ると日本から持参して来た『平家物語』などの古典を読み耽る充実した日々。しかも、当地では久一郎の知り合いもおらず、名実ともに父権の重力圏から脱却して、誰にも気兼ねすることなく、思う存分、文学に没頭することができたのである。

そして、この頃から荷風のフランス文学に対する方向性に變化の兆しが

見え始める。日本にいる時、彼は熱烈なゾラの信奉者だったが、封建的色彩が残る日本社会や強権的な父親から離れ、アメリカという新天地で自由を謳歌しているうちに、いつしか社会の不正や腐敗に対するゾラの苛烈すぎる告発姿勢に違和感を抱くようになる。日本にいる友人にゾラ批判の手紙を送ったのもこの頃で、荷風は社会派のゾラに代わって、フランス芸術文化の香りを色濃く漂わせるモーパッサン文学へと舵を切り始める。

『女の一生』に象徴されるモーパッサンの作品には、女性や奔放な性的好奇心を主題にしたものが多く、それが日本の儒教的束縛から解放された荷風の性愛志向と波長が合い、さらに荷風のフランス観がゾラの抵抗文学より甘美なモーパッサンの世界に共鳴したのかもしれない。

翌1905年(明治38)3月にシカゴを訪れた荷風は、その後、キングストン滞在などを経て、同年6月30日午後5時、最終目的地であるニューヨークに到着する。シアトル上陸から1年8ヵ月後のことである。

荷風はすぐさまブルックリン・コンコード通りにある日本人相手の安宿に旅装を解き、マンハッタンのメインストリートに立って摩天楼を見上げたり、広大なセントラル・パークを散策するなどした後、夜を迎えて「新大陸の大都、^{ニューヨーク}紐育は驚くべき不夜城に御座候」と驚愕の声を上げている。

とりわけ、ブロードウエーの賑わいには目を見張ったようで、「無数の男女、無数の馬車の雑踏」「五彩燦爛たる燈火に見渡すかぎり街は^{きなが}宛ら魔界の夢の如く」と興奮気味にその感想を述べている。そして、交差点に佇んでこの光景をじっと見詰めながら、「あゝ、如何なる事業も天才も、時^{きた}来れば皆滅びて^{しま}ふ人生には、唯だこの青春の狂楽、これより他には何物⁽⁴⁾もない」と魔界に魅入られたのか、刹那的な心境に陥っている。

そして7月8日、ニューヨーク総領事館に勤務している外交官で従兄の永井素川(本名・松三)に会っている。彼は荷風より2歳年長で、何事も気楽に相談できる兄貴のような存在だった。その素川に、荷風は「一刻も早くアメリカを脱出してフランスに渡りたい」と本心を打ち明け、フランス渡航にどれほどの費用がかかるのか、またその捻出方法についても相談し

ている。その時の様子を、荷風は「米国の生活の更に余の詩情を悦するものなきを歎じ仏蘭西に渡りて彼の国の文学を研究せん事の是非を問ひぬ」「子は犬にこれを賛成し先づ其の旅費を才覚すべく暑中休暇を労働に当つべしと云ふ」と日記に記している。

この素川の提案を受けて、「余は直にヘラルド新聞に奉公口を求むる広告を出しぬ⁽⁵⁾」。この「ヘラルド」は当地のニューヨーク・ヘラルド紙のことで、荷風は同紙に「アメリカ人家庭でのハウスワーカー」という求職広告を出す⁽⁵⁾が、この求職広告の効果はまったくなかった。厳しい求職状況を思い知らされて落胆に暮れていると、その1週間後の15日、素川から「ワシントンの日本公使館で臨時の小使いを募集している」との知らせを受ける。荷風にとって、フランスへの渡航費が稼げるならニューヨークでもワシントンでも一向に構わず、さっそく応募することにして、素川にその斡旋を依頼する。

この臨時職員の募集は、日露戦争の講和交渉がアメリカのボーツマスで行われることになり、在ワシントン日本公使館に人手が必要となったためだが、素川の口利きが功を奏したのか、19日朝、ニューヨークの荷風の元に「採用」の連絡が入る。このため、荷風は同日正午発のペンシルベニア鉄道の列車に飛び乗り、慌しくワシントンに向かう。

夕刻、ワシントンに到着した荷風はその足で公使館に赴き、当直の書記生と面会して担当業務について説明を受ける。仕事の内容は、公使館の3階に寝泊りして、スタッフが出勤して来る前に館内を掃除しておくこと、さらに配達されて来た郵便物を仕分けたり、新聞や雑誌類の整理、外部からの電話の取り次ぎといった雑務だった。

かつてエリート官僚としてアメリカに留学したことのある父、久一郎がこの仕事の内容を聞けば、プライドがひと一倍高かっただけに「息子にそんな雑用をさせて！」と憤慨したかもしれない。しかし、フランスへの船賃稼ぎと割り切っていた荷風にとって、この業務内容にまったく不満はなかった。そればかりか、給与が予想外に高かったことや公使館に住み込む

ため家賃が不要だったこと、さらに残業もなく、仕事が終わった後、自室でゆっくりと読書をする時間的ゆとりがあることは、何ものにも代え難い魅力だった。

さっそく、その夜から公使館に住み込みを始めるが、それが如何に嬉しかったかは、「余は日露談判決了の日までこゝに労働し其の給金と故国よりの送金とを合算して秋風と共に一躍大西洋を越えて仏蘭西に行かんとす」という意気軒昂な記述から明白である。⁽⁵⁾

4. ワシントン滞在と娼婦「イデス」との出会い

このように、ニューヨーク到着直後から始まったフランス渡航への準備は、順調な滑り出しを見せる。それは取りも直さず、父親が切望したアメリカにおける実学^{ビジネス}の勉強が、荷風の頭の中にまったく無かったことに他ならない。いずれにせよ、荷風は1905年(明治38)7月から10月末までの間、ワシントン公使館の臨時雇いとして黙々と雑用をこなすことになる。

その一方で、荷風は久一郎に対して相変わらず「フランス留学」を懇願する手紙を出し続けている。しかし、荷風の将来は実業界しかないと考えてアメリカに送り込んだ久一郎が、その願いを受け容れるはずはなく、同年8月29日、公使館の荷風の元に届いた手紙で、久一郎は「フランス行きは同意しがたい」と明確に拒絶している。

それを読んだ荷風は「失敗と失望とに馴れたる予は今更に何の驚き嘆く事あらんや」と冷静を装うが、他方「余は早晚華盛頓を去らば身を紐育の陋巷^{ろうこう}に晦まし再び日本の地に帰る事なかるべし」と半ば自暴自棄の心境に陥⁽⁶⁾っている。

つまり、フランス渡航のために公使館で働いていることが、まったくその意味をなさないことになるわけで、この日を境に荷風は鬱々たる気分⁽⁶⁾に陥る。しかし、その2週間後の9月13日、絶望感に打ちひしがれた荷風の魂を激しく揺さぶる劇的な出会いが待ち構えていた。

当夜、荷風は投げやりな気持ちで公使館近くの酒場で酔い痴れていたが、そこへ遊び客を物色するために金髪の若い娼婦が入って来る。彼女は思わせぶりな視線を荷風に投げ掛け、荷風もそれに応えて共に杯を交わして意気投合する。この娼婦こそ、荷風がアメリカ滞在中に愛し続けたとされる「イデス」だった。

娼婦と客という関係で他愛もない戯れ話をしていた2人だが、荷風は何事につけ率直な性格のイデスが気に入り、店を出て初秋のポトマック河畔をしばし散策する。そして、イデスの誘いを受けて彼女のアパートに立ち寄り、明け方まで情痴に耽る。この日に始まった2人の関係は、以後、荷風がアメリカを去る日まで2年近く続くことから、荷風の彼女に対する気持ちには肉欲だけではなく、真摯なものがあつたものと思われる。

イデスの写真が残っていないので、どのような容貌の女性だったかは知る由もない。しかし、「西洋の女が好き」と広言して憚らない荷風は次のようなアメリカ人女性に心魅かれたと述べていることから、多少は参考になるかもしれない。

「自分は西洋婦人の肉体美を賞讃する第一人で、その曲線美の著しい腰、表情に富んだ眼、彫像の様な滑な肩、豊かな腕、広い胸から、踵のはばか高い小な靴を穿いた足までを愛するばかりか、彼等の化粧法の巧妙なる、流行の撰(7)択の機敏なのに、無上の敬意を払つて居る第一人である」

荷風の性的嗜好の最大の特徴は、その対象の大半が娼婦や芸者など玄人筋の女性だった点にある。しかし、荷風は素人娘と玄人娘を区別、あるいは差別する意識を持ち合わせておらず、娼婦や芸者だからといって蔑む気持ちは毛頭なかった。その点が正真正銘の「自由人」である荷風の真骨頂でもあるが、明治の社会は封建的階級性を濃厚に引き摺っており、帰国後、慶應義塾の教授の身分でこの種の女性たちと交情を重ねたことが、大学当局ばかりか世間から輦ひんしゆく轡せうを買うことになる。

イデスに対する気持ちにしても、荷風はごく普通の男女関係という認識だったが、日本文壇ではこれを娼婦との関係に矮小化して論じたため、荷

風とその作品は不当な扱いを受けることになる。いずれにせよ、アメリカという海の彼方の異国において、イデスは荷風という人間を理解し、励まし、慰めてくれるかけがえのないオアシスのような存在となった。

一方、荷風は日露戦争の講和交渉が行われているアメリカ、それもワシントンの日本公使館で働いていたにも拘わらず、その成り行きにはまったく無関心だった。それは、荷風が毎日つけていた日誌に記述が無いことから明らかで、そのような国際情勢より自身の内なる文学世界に籠って、至福の日々を送っていた。

それは、荷風がワシントン到着後に記したこの街に対する次のような感想にその一端が視える。「あゝ、此れが西半球の大陸を統轄する唯一の首都であるか、と意識して、夕陽影裏、水を隔て、彼方遥かに眺めやれば、何とはなく、人類、人道、国家、政権、野心、名望、歴史、と云ふ様なさまざま^{やう}な抽象的の感想が、夏の日の雲の様^{やう}に重り重つて胸中を往來し始める」「と云ふものゝ、自分は何一つ纏^{まとま}つて、人に話す様^{やう}な考えはなかつた」。つまり、世界の大都にやって来て身を引き締めながらも、政治的関心事から距離を置くことを宣言している⁽⁸⁾のである。

後に小説『或る女』で高名を轟かすことになる有島武郎は1903年(明治36)8月、宗教的動機を抱いて渡米し、ハーバード大学大学院などで学んだ後、荷風が日本公使館で働いていた同時期、ワシントンの国会附属図書館に通って研究を重ねていた。有島は渡米後に勃発した日露戦争を祖国存亡の危機と認識し、日々、固唾を呑んで戦局を見守っていた。そして、アメリカにおける講和交渉の行方についても、当地の新聞を貪り読むなど強い関心を示し、自分の世界にしか目を向けない荷風とはまったく異なるワシントン生活を送っていた。

このように、荷風の徹底した個人主義と、それと裏腹の外界に対する無関心ぶりは、講和交渉の戦場だった日本公使館においても、館員たちから奇異な目で見られていたに違いない。これは同じ文学者であっても、日露戦争に第二軍軍医部長として出征した森鷗外、さらに日本軍の勝利に興奮

して「現代日本の誇り」と讃辞を送った夏目漱石とも決定的に異なる。一方、与謝野晶子は旅順攻囲軍の一員として戦っている弟に向けて「君死に給ふことなかれ」と詠み、軍関係者の中で大きな反発を招くことになったが、外界から隔絶された荷風の虚無的な姿勢はこの反戦歌とも一線を画するものだった。

荷風はアメリカが好きではなかったが、そこから国家主義と対極にある西洋の個人主義と合理主義を学んだといえるかもしれない。荷風には、若い頃からそのような傾向が見られたのも事実だが、本場であるアメリカにおいて一層磨きがかかり、それは彼の人生観だけではなく、社会観を支える強固な礎^{いしづえ}となっていく。

第二次大戦開戦の発端となった真珠湾攻撃を大本營が発表して、日本列島が大騒ぎになっている時、荷風がそれを意図的に黙殺したことは、その端的な例として挙げられるだろう。彼が公開を前提として書き綴った日記『断腸亭日乗』には、日常生活の細々としたことが書かれ、後に日記文学の金字塔として高く評価される。

しかし、この真珠湾攻撃については記述がなく、翌日の1941年(昭和16)12月9日の項では「開戦の号外出でてより近鄰物静になり来訪者もなければ半日心やすく午睡⁽⁹⁾することを得たり。夜小説執筆。雨声瀟々たり」とことさら平静を装っている。開戦に沸く国や軍当局、そして国民までを痛烈に皮肉っているわけで、戦争については「我関せず」というその姿勢は、日露講和交渉に対する無関心な態度と軌を一にするもので、そこから荷風の徹底した「個」の思想と「虚無」の諦観が読み取れる。

さらに、この第二次大戦に関する荷風の記述を『断腸亭日乗』から拾ってみると、反逆罪に問われかねないような驚くべき見解が散見される。同年6月20日付けの「余はかくの如き傲慢無礼なる民族が武力を以て鄰国に寇^{こう}することを通^お歎して惜かざるなり」「米^{すみやか}国よ。速に起つてこの狂暴なる民族に改⁽¹⁰⁾悛の機会を与へしめよ」というのがその最たるものである。つまり、軍国主義化した日本が中国を侵略するのは野蠻極まりない暴挙で、ア

アメリカに日本に鉄槌を下すよう要請しているのである。

そして、大戦が終焉を迎えた1945年(昭和20)8月15日の項では、「あたかも好し、日暮染物屋の婆、鶏肉葡萄酒を持来る、休戦の祝宴を張り皆々酔うて寝に就きぬ」と誰憚ることなく、心から終戦を祝っている。⁽¹¹⁾

「挙国一致」「一億火の玉」の軍国主義の嵐が吹き荒れていた時代に、公開予定の日記とはいえ、一貫してこれほど辛辣な批評を書き綴っていた作家が、当時、存在していたことは大きな驚きといえるだろう。戦時中、軍当局の圧力によって多くの著名作家が日本文学報国会に入会し、従軍作家となって戦争協力をしているのに対し、荷風はそれらに一切組しなかったばかりか、加担した作家たちを「人間の屑」と罵倒している。

かといって、荷風が戦争を遂行する軍当局に面と向かって反抗する、勇ましい作家だったわけでは決してない。アメリカの爆撃機による東京大空襲が始まると、他人のことは一顧だにせず、荷風は恐怖心に慄いてひたすら逃げ惑うのである。挙句の果てに、東京を脱出して岡山にまで逃れ、当地に疎開していた谷崎潤一郎に救いを求めている。その間も自分の世界に籠って、刊行のあてのない小説を書き続け、谷崎に会った際には「私の遺稿になるかもしれない」と、それまで書き溜めていた原稿の束を谷崎に預け、彼を困惑させている。

このように、荷風は自分の内なる小説世界の外で何が起ころうとも我関せざる姿勢を貫き、阿鼻叫喚の殺し合いが日常化している戦時下にあっても、ひたすら妖艶な小説を書き続けていた。荷風という人間の深奥には文学至上主義と芸術至上主義が脈々と流れており、それが社会を俯瞰する時の絶対的な座標軸となって戦争に^{あい}相対していたのである。

荷風のワシントン時代に話を戻すと、日露間の講和交渉はアメリカの後ろ盾もあって順調に推移し、9月5日、世にいう「ポーツマス条約」が成立する。当然のことながら、講和成立によって公使館の業務も平常体制に戻ることであり、その直後、荷風は公使館から10月末で臨時雇いの契約を解除すると申し渡される。

ニューヨーク到着直後の7月から働き始めて3ヵ月余、イデスとの巡り合いという思わぬ光明もあって、荷風はこのワシントンの街をこよなく愛することができた。「余はこれまで見たりし米国の都市中にて街衢悉く園苑えんの如きこのワシントンほど心地よき処ところはなかりし」という日記の記述を見れば一目瞭然(12)である。

この間も、荷風は久一郎とフランス行きを巡って手紙の遣り取りを重ねているが、9月23日、荷風の元に届いた手紙はフランス行きを拒絶する最後通牒というべきものだった。自由奔放な個人主義者だった荷風が、金銭的援助を受けていたにせよ、何故、これほどまで「父親の許可」に拘泥するのか理解に苦しむが、この忌まわしい手紙を一読した荷風は、まるで母親に泣きつくかのようにすぐさまイデスの元に駆けつける。

そして、祝い事でもないのにシャンペンを浴びるように飲んで、父親を大声で罵倒するのだった。その後、父親への怒りをぶつけるかのようにイデスと激しく肉欲に耽っている。その時の様子を「淫楽を欲して已まず」「淫楽の中に一身の破滅を冀こいねがふのみ」と日記に書き残している。(6)

このようにして、荷風のワシントン滞在は終焉を迎えることになるが、この地に好印象を抱くに至った理由として、職場が祖国の公使館だったという安心感、フランス行きの旅費稼もちぎという充実感、そして「街々を蔽おほふ深い楓もみぢの木立の美しさ」という表現に象徴される緑豊かな街並みや、それが醸し出す清楚な雰囲気が挙げられる。もちろん、イデスの存在が最大の要因だったことはいうまでもない。そして、荷風はワシントンを去る前日、彼女のアパートを訪れて別離わかの盃さづきを酌み交わしている。

5. 銀行勤めを強制されて「罪悪を犯し、 墮落の淵に沈みたる心地」

翌11月2日、荷風は後ろ髪を引かれる思いでワシントンを列車で発ち、その日の夕方、ニューヨークに帰着する。すぐにイーストサイドにある日

本人経営の簡易宿泊所に身を寄せるが、そこは片道切符でひと旗揚げようとアメリカに渡って来た日本人苦学生たちの溜まり場だった。ワシントンのエリート外交官たちの優雅な生活を目の当たりにしてきた荷風にとって、彼らの日常は同じ日本人として比較するのにも憚られるほど惨めなものだった。そして、そこに自身の置かれた境遇を重ね合わせた荷風は、必死になって夢を追い求める彼らの姿に勇気づけられ、「如何なることがあってもフランスへ行く」という決意を新たにす。

兎にも角にもフランスへの船賃を稼ぎ出すことが焦眉の急だったが、ニューヨークに戻ってみると、公使館のような割の良い仕事はまったく見当たらなかった。多少の蓄えと日本からの送金があるとはいえ、日々の生活にお金がかかる大都会で無職とあれば、困窮するのは目に見えている。

そのような事情もあって、荷風はまもなく、かつて滞在したことのあるミシガン州のカラマズーに移動する。そこでも無聊をかこって、読書三昧という半ば浪人のような日々を送っていたが、11月24日、そこへ父、久一郎から予期せぬ手紙がニューヨーク経由で転送されて来る。

その内容は「(久一郎が)横濱正金銀行の頭取と会って、荷風を同銀行のニューヨーク出張所で働かせてもらうことにした」というものだった。アメリカにいても“フランス被れ”を続ける荷風に愛想を尽かし、半ば放置していたものの、彼の行く末を案じた久一郎が、荷風の生活保障と実学の研鑽という一石二鳥を狙って一策を講じたのである。

ところが、荷風はこの手紙に当惑こそすれ、感激した様子はまったくなかった。「余は米国に在る事既に三年なりと雖も商業に関しては学ぶ処全く無し」という冷めた反応だった⁽¹³⁾。つまり、自分はフランスに渡って文学の勉強をしたいと切に願っているのに、アメリカで砂を噛むような無味乾燥な銀行勤めなどはもつてのほか、余計なお世話と憤慨したのである。それは、その時に至っても荷風の人生観を理解し、それを尊重しようとならない頑固な父親に対する失望感の裏返しでもあった。

そのような嫌悪感もあって、荷風は手紙を放置していたが、その6日後、

今度は正金銀行ニューヨーク出張所から“出社”を求める電報がカラマズーに届く。この申し出を断るべきか否か、それに代わる渡航費の捻出は可能か否かと散々迷った挙げ句、荷風は12月4日になってようやくニューヨークに戻って来る。いかにも渋々といった態度であるが、さらに3日経過した7日、荷風はようやくウォール街63番地にある同銀行の出張所に“出頭”するのである。

このように、久一郎と荷風の間には、人生観の決定的な違いに起因する凄まじい相克が横たわっていた。それは父子の亀裂といったレベルを超えて、人間的乖離にまで達する深刻なものであった。しかし、両者の力関係は一目瞭然で、跡取りの“お坊ちゃん”である荷風は、常に絶対的権威である父親の命令に従わざるを得なかった。それと併わせて、どれほど忌み嫌う父親であっても、自分の身を案じてくれる“親心”が認められる限り、それに反抗することはできなかった。それ故、荷風はこの銀行勤めという申し出を拒否すると、「父親との和を永久に閉ざすことになりかねない」と危惧し、渋々、それに従うことにしたのである。

しかし、予期した通り、銀行での仕事は風流人である荷風にとって、あまりにも味気ないものだった。そのようなところに身を置いたことが余程辛かったのか、勤務初日の夜には「美の夢より外には何物をも見ざりし多感の一青年は忽ち世界商業の中心点なるウォールストリートの銀行員となる何等の滑稽ぞや」と捨て鉢(14)になっている。

このように、憧れの文学や芸術とは決定的に異なるビジネスの世界に“身を落とした”ことへの屈辱は拭い難いものがあり、翌日の日記にも「余の生命は文学なり家庭の事情止むを得ずして銀行に雇はるゝと雖余は能ふかぎりの時間をその研究にゆだねざる可からず(15)」、さらに「余は一時文藝に遠ざからざるべからざる事を思ふ時は何等か罪惡を犯したるが如く又深き墮落の淵に沈みたるが如き心地して心中全く一点の光明なし」と暗澹たる気持ち(16)を吐露している。

このような絶望感を癒やすため、荷風は毎晩のように歓楽街に足を運び、

夜更けまで酔い痴れるのがあった。折角、アメリカまでやって来たのに、フランスに行けないのではないかという疑心暗鬼が首をもたげ、荷風は言い知れぬ不安感に苛まれる。それは人生を賭けた小説家への道の断念を意味するわけで、荷風はこの時、まさに生きるか死ぬかの岐路に立たされていたのである。

6. 公園の樹下でフランスを夢想し、幽玄の世界に浸る

資本主義に魂を売り渡したかのような敗北感を胸に、荷風は移ってきたセントラルパーク近くのアパートからウォールストリートの職場に通うが、休日になると水を得た魚のようにオペラやコンサート、演劇、そして美術鑑賞などに勤しみ、束の間の「生」を満喫している。その多くが「フランス」に関連するもので、カーネギー・ホールでのドビュッシーやサンサーンスの管弦楽音楽、メトロポリタン歌劇場ではグノーの『ファウスト』やビゼーの『カルメン』、さらにフランスを代表するサラ・ベルナールのニューヨーク公演にも足を運んで、心の中は「フランス」で満ち溢れていた。

このように、苦痛以外の何ものでもない銀行業務に身を縛られる一方、ニューヨークで“擬似フランス”を探し求め、一喜一憂の日々を送るのだった。そして年が明けた1906年(明治39)1月7日、将来、必ず訪れるであろう訪仏に備えて、ウエストサイドのド・トゥール夫人宅に引っ越している。夫人は生粋のフランス人で、彼女から洗練されたフランス語の日常会話を教わると同時に、モーパッサンの作品に登場する難解な俗語についても教を乞うている。それは銀行勤めという屈辱を払拭し、未来に向けて希望の光を見出そうとする執念からの行動でもあった。

アメリカにおいて、荷風はとりわけオペラ鑑賞と美術館巡りを楽しんでいたが、ある日、ニューヨーク美術学校の油絵展覧会にも足を運んでいる。幾多の美術鑑賞で磨き抜かれた荷風の審美眼は漱石と同様、専門家の域に達しており、この油絵展覧会について「感服すべき作品一つもなし亜米利

加は駄目なるかな」と手厳しい批評を下している。⁽¹⁷⁾

そして、少しでも生のフランスに触れようと、フランス人移民の街であるウエストサイドのフレンチ・クォーターを度々訪れている。その本屋でパリから直輸入された最新の雑誌や書物を買求めたり、顔馴染みになった古本屋の主人からフランス人女性のヌード写真を見せてもらったりしている。

また、様々な訛りのフランス語が飛び交うカフェやバーでは、ギャルソン(給仕人)や酔客たちとフランス語で会話を交わし、束の間の「フランス」を実感するのだった。カフェではパリから郵送されて来た新聞を丹念に読み、憧れの地の政治や社会情勢を知ることにも余念がなかった。それに加えて、この移民街に屯するフランス人娼婦たちとも交遊を深めている。荷風によると当時、彼女たちと遊ぶには3ドルから5ドル必要だったという。

このように荷風のニューヨーク生活のうち、プライベートな時間の大半は“フランス的”だった。また、フランス文学については主としてモーパッサンの作品を読み漁っていたが、それと切り離せないのがマンハッタン中央部に位置する緑豊かなセントラル・パークだった。荷風はこの公園に頻繁に足を運び、木陰のベンチで野鳥の囀りを耳にしながら、モーパッサンやボードレールの詩集をフランス語で口遊むのだった。

そこは、荷風にとってフランス文学の擬似的幽玄の世界であると同時に、至高の桃源郷でもあった。つまり、アメリカにいながらアメリカを忘却し、日本人でありながらフランス人になったような錯覚に陥ることができる秘密の幻想空間だったわけで、荷風は1906年6月9日にもこの公園の樹下で黄昏が迫るまでモーパッサンの詩集に没頭している。それがいかに至福の時であったかは、「余は頭髮を乱し物に倦みつかれしやうなる詩人風采をなし野草の上に臥して樹間に仏蘭西の詩集よむ時ほど幸福なる事なし」「笑ふものは笑へ余は独り幸福なるを」という日記の記述から覗うことができる。⁽¹⁸⁾

このように、荷風はフランス文学が醸し出す甘美な世界に浸るとともに、目の前を通り過ぎるアメリカ人女性の見事な肉体美と、洗練されたファッションを密かに楽しんでいる。ニューヨークに移って来たイデスを伴ってこの公園を訪れたこともあるが、その時はこれ見よがしに仲良く腕を組んで散策し、木陰のベンチで熱い接吻を交わしたこともある。このように、セントラル・パークはパリにおけるリュクサンブール公園と同様、荷風にとってもっとも寛ぐことができる都会のオアシスだったわけで、荷風は落ち葉が舞い散る晩秋がもっとも風情があったと述懐している。

この公園に続き、荷風が好んでよく散策したのがハドソン河畔である。川はその悠久の流れを通じて、人間の様々な所業を目撃し観察し続けながらも、黙して語ることはない。つまり、物言わなくても、何もかもお見通しなのである。そのような川に荷風はひと一倍、親近感を抱き、畏敬の念さえ抱いていた。その原点は幼い頃から慣れ親しんだ隅田川にあるが、このハドソン川も例外ではなく、フランスではリヨンのローヌ川、そしてパリのセヌ川も心魅かれる存在だった。そして、それらの河畔を思索に耽りながら散策するのが、荷風散人の最大の楽しみだったのである。

永遠の放浪者といわれる荷風にとって、川は大海を通じて世界と繋がっているという解放感、さらに流れて消えてしまうという喪失感や虚無感を内に秘めた存在で、そのことが共鳴を覚える要因だったのである。それと併せて、大河の流れに旅人特有の憂愁を感じ取り、そこに「母性」を抱いていたのかもしれない。

父親が斡旋してくれた邦銀のニューヨーク出張所で働きながらも、フランスに遊学したいという荷風の思いは募る一方で、この間も再三にわたって久一郎に懇願の手紙を送っている。しかし、久一郎にしてみれば、いったんフランス行きを容認すると、荷風は久一郎が望む実業家ではなく、小説家の道に進んでしまう可能性が極めて強くなる。官僚的思考の強い久一郎にとって、小説家は得体の知れない放蕩遊民のようなもので、永井家の長子にそれを許す訳にはいかなかった。それ故、この年の6月にも「フラ

ンス留学と小説家になることは許さない」という手紙を荷風に送付している。

それが余程ショックだったのか、荷風は真夜中にアパートを飛び出し、暗闇に包まれたセントラル・パークの中を呻き声を上げながら彷徨している。そして、明け方になってアパートに戻り、「余は再び家に帰らざるべし」「旅館のボーイが然らずば料理屋の給仕人如何なるものにも姿を替へ異郷に放浪の一生を送らんかな」という憤怒の檄文を日誌に綴っている⁽¹⁹⁾。

このように、荷風が熱い想いを抱き続けてきた「フランスへの夢」は、父親によって何度も打ち碎かれるが、それに対して荷風は父親への不満や愚痴をこぼすものの、親の重力圏から脱して自力でフランスに渡ってやるといった意気地は見られなかった。帰国後、作家として名を成し、権力に対して敢然と反旗を翻した強靱な荷風像からは、想像もできないひ弱な存在だったのである。

7. イデスの「愛の告白」と宿命としての別離

このようにして、荷風は意に添わぬアメリカの地で、しかも忌み嫌う銀行業務に身を縛られ、悶々とした日々を送っている。その傷心に同情し、それを癒してくれたのが、ワシントンで懇ろになった娼婦イデスだった。荷風が絶望感に打ちのめされ、自暴自棄になっているのを知って、彼女は1906年7月8日、ワシントンからニューヨークにやって来る。

2人は45丁目にある「ホテル・バルモント」で再会を果たすが、このホテルはもっぱら高級娼婦が客との逢引に使うところだった。約9ヵ月ぶりの再会ということもあって、2人の感情は堰を切ったように激しく燃え上がり、度重なる情交の後、その余韻に浸りながらイデスは「あなたと所帯を持ちたい」と夢を語る。

娼婦という賤業に就いているものの、ブロンドの白人であるアメリカ人女性から「愛の告白」を受けたわけで、黄色人種として数々の差別を体験

してきた荷風にとって、それは心を^{くすぐ}撥られる愉悦だったに違いない。実際、その時の感激を夢見心地で「余は宛然^{えんぜん}仏蘭西小説中の人物となりたるが如く」と少々得意げに述べている。⁽²⁰⁾

明治の世における西洋と東洋、そして白人と黄色人種の間横たわる深い溝を斟酌すると、荷風が浮かれた気持ちになるのは当然かもしれない。しかし、荷風の真の恋人はあくまでも「フランス」であって、アメリカではない。このことに対する荷風の拘りは執拗で、どれほどイデスとの肉欲に溺れ、愛の言葉を交わしたとしても、心の深奥では常に「フランス」が第一の恋人だった。それを至上とする考えは、彼女の告白を耳にした後も微動だにしなかった。

イデスの愛の告白が荷風の創作でないとすれば、それを耳にした瞬間、彼が鷗外の作品『舞姫』を想起したことは想像に難くない。尊敬してやまない大文豪の作品と同様のことが、自分の身にも起きているといった昂揚感がそれである。

荷風は若くして女性に興味を示す早熟の青年だったが、その特徴は相手が一般女性ではなく、娼婦や芸者など玄人筋だった点にある。そのことが影響したのかどうかは定かでないが、荷風は女性に対して常に心を開くことなく、従って信用することもなく、常に距離を計りながら冷徹な眼差しで眺めていた観がある。つまり、荷風にとって女性は尽きせぬ興味の対象ではあったが、そこには肉欲が大きな要素となっており、純愛はその対象ではなかった。

それだけに、イデスから愛の告白を受けて、荷風は「涙がこぼれるほど嬉しかった」と殊勝な気持ちを述べているが、それが果たして真意であったのかどうか。将来、公開されることを想定した日誌に、このイデスとのことが書き残されているが、それらは必ずしも実際の行動記録ではなかったようにも思える。

実際、『あめりか物語』や『ふらんす物語』は虚実の境目を曖昧にすることによって、劇場性や臨場感を高めるという巧みな小説技法を執ってい

るが、『日誌』に記されたこのイデスの「愛の告白」にしても、その虚実を巡って様々な疑念が俎上にのぼっている。それは、白人の娼婦が当時、差別されていた黄色人種にプロポーズするだろうか、あるいは鷗外作品（『舞姫』）の向こうを張って、そのようなドラマ仕立てにしたのではないのかといった疑いで、それについては後で詳述する。

いずれにせよ、荷風がどうしても成就させなければならないのは「フランス行き」であって、イデスが熱い「愛の告白」をしたとしても、渡仏が実現すれば別離は避けられない。その時が来れば、彼女を冷徹に捨てる覚悟が求められるわけで、実際、荷風はそのことに思いを馳せ、愛を告白された後、イデスの寝姿を眺めながら、そのことのあまりの冷酷さに慄然とし、朝まで一睡もできなかったという。

愛の喜びと宿命としての別離、そして、その狭間に横たわる苦悩に苛まれる心情を、荷風は次のように謳い上げている。「恋と藝術の激しい戦いの布告」「あ、男ほど罪深きはなし⁽²⁰⁾」、さらに「余は娼家の奴僕となるも何の耻る処かあらん⁽²¹⁾」「新大陸の諸処に彷徨し緑蔭深き華盛頓の街頭に囚らず金髪の一女に逢ひ遂に別るべからざる情縁に悩む⁽²²⁾」。日誌の記述でありながら、小説の中の悲恋物語を想起させるような、あまりにも感動的な表現と愛惜漂う修辞——それ故、イデスとの話は「創作」ではないかという疑念が払拭できないのである。

イデスのニューヨーク訪問に話を戻すと、父親の反対で陰々滅々たる気分には陥っている荷風を元気づけた彼女は翌日、早々にニューヨークを去っている。そして同月28日、今度は本格的にニューヨークに引っ越して来る。当日、荷風は彼女と落ち合ってブロードウエーを散策したり、酒場を巡り歩いたりした後、イデスの強い求めもあって、彼女を自身のアパートに招いている。

明け方になってイデスはホテルに引き揚げるが、翌日が日曜日だったこともあって、荷風は再びイデスと会って、終日、飲んだり食ったりしながら過ごしている。その時に、荷風はイデスの生い立ち、荷風の言葉でいえ

ば「幸^{さち}薄^こき来^{かた}し方」を存分に聞かされることになる。

外は陰鬱な雨ということもあって、イデスは白ワインでほろ酔い機嫌になりながら、延々と人生の告白を続ける。感極まったのか、時折、頬に涙を伝わせながら、自身の不幸だった少女時代や家庭環境、そして娼婦に至った理由を訥々とした言葉で語るが、荷風はその詳細を明らかにしていない。イデスは「結婚」を意識してこのような告白をしたと思われるが、荷風は居たたまれない気持ちだったに違いない。イデスはその後、まもなくホテルを出て49丁目にアパートを借り、タイムズ・スクエア界隈を本拠地として売春稼業を始めている。

この頃、荷風はフランス語の夜学に通い始める。フランスへの渡航を確固たるものにするための決意だが、その語学学校に通う途中、マジソン街で遭遇した夕暮れ時の美しい木漏れ日に、パリへの思慕を重ね合わせている。「夏の黄昏^{たそがれ}尽きて正に夜ならんとする街上^{がいじょう}の光景画にて見る巴里^{パリ}の如し」「覚え^{たはず}ず佇^{ふけ}みて空想⁽²³⁾に耽る」。夢想の世界でしかないパリを、その光景にダブらせて抒情的に謳い上げているのである。

その一方で、荷風の脳裏を離れないのは父親の頑強な反対で、それを思うと途端に悲観的になり、「仏蘭西^{フランス}の土も踏み得ずして空しく東洋の野蛮国に送り帰さるゝ此の身は長く生きたりとて何の楽しみかあらん」と悲嘆⁽²⁴⁾の涙にくれるのである。

ニューヨークに引っ越して来たイデスは、このような感情の起伏の激しい荷風のために献身的な努力をしている。荷風がパリのことをもっと知りたいというのを聞いて翌1907年1月、自分のアパートの隣室に住むパリ出身のフランス人娼婦を荷風に会わせている。3人で夕食を共にしながらの歓談だが、荷風は水を得た魚のように、この娼婦からパリの様子を根掘り葉掘り聞き、時折、フランス語で会話を交わして空想のパリに遊ぶのだった。

このように、イデスの存在を無視して2人が話に熱中になっているのを目の当たりにして、彼女は一体、どのような想いに駆られたのだろうか。

荷風のフランス行きが実現すれば、必然的に自身がアメリカに置き去りにされるという運命、そして荷風はイデスの愛を蔑ろないがしにすることすら厭わいとない「冷たい人間」であるかもしれない、と薄々察知し始めたのかもしれない。

その後の荷風の人生を見ると明らかであるが、彼は娼婦や芸妓、踊り子たちから愛される稀有な存在だった。大学教授や文豪という身分、さらには文化勲章を受章した著名人でありながら、人目を憚はばからず、この種の女性たちと交遊を続けている。イデスとの交情もその延長線上に位置づけられるが、そこには荷風が心酔するモーパッサンの世界が二重映しになっているのである。

8. 聖少女「ロザリン」との結ばれない悲恋物語

イデスとの恋に加えて、『あめりか物語』所収の短編『六月の夜の夢』では、ニューヨーク滞在中に新しく「ロザリン」という女性が登場する。荷風は1907年(明治40)6月、フランス行きが暗礁に乗り上げた憂さを晴らすため、ニューヨーク湾口にあるスタトン島に滞在している。海辺の民家に間借りして、しばし癒しの時を送っていたが、その時に出会った村娘が彼女である。

ロザリンはイギリス生まれで、娼婦のイデスと違って、聖少女のように純粹無垢な女性だった。そして、ニューヨークの喧噪を離れた長閑のどかな自然の中で、2人はイデスとの愛欲関係からは想像もできないプラトニックな愛を育むのである。

ただ、この女性は『六月の夜の夢』に登場しているものの、荷風の日常を記録した『日誌抄』には記載されていない。イデスが日誌で詳細に書かれているのに、『あめりか物語』に登場していないのとまったく逆のパターンである。この不自然さに加えて、荷風がアメリカを去る直前になって唐突にロザリンが出現していること、さらに荷風は「処女には興味がな

い」と広言して玄人筋の女性に傾倒していたのに、その対極にある宗教心の厚い女性に純愛を捧げていることなどから、その実在には疑問符が付けられている。

これについて、菅野昭正は『六月の夜の夢』に描かれたロザリんととの結ばれない悲恋の物語はあまりにも「稚拙で陳腐」と指摘しながらも、宿命的に結ばれない恋の悲哀に自ら酔う情感が、島の自然の抒情と見事に溶け合っている点を評価して、「ロザリんととの交情のことは、スターテン島滞在中に友人に手紙で知らせているし、ずっと後年の作品『井戸の水』でも回想されているくらいだから、こういう女性と出会ったのは事実なのだろう」と実在の可能性を肯定的に捉えている⁽²⁵⁾。

しかしその一方で、菅野が指摘した知人宛の手紙そのものが、『あめりか物語』に登場させたロザリンの実在性を意図的に裏付け補強しようとした作為だった可能性も否定できない。疑えばキリがないのかもしれないが、小説技法に関しては卓越した策士である荷風なら、十分、首肯し得る手口といえるかもしれない。荷風が『あめりか物語』をロザリんととの悲恋物語で締め括ろうと考えたとしても、決して不思議ではないのである。

アメリカにおいて常にフランスの幻影を探し求めていた荷風の元に、勤め先である銀行の支配人から呼び出しがかかったのは、その直後の1907年7月2日のことである。荷風にとって、無味乾燥な実務に精励しなければならぬ銀行業務は苦痛以外の何ものでもなく、それ故、仕事に身が入らず、遅刻や早退は言うに及ばず、勤務態度も投げ遣りだった。このため、同僚たちから「そのうちに解雇されるぞ」としばしば忠告を受けていた。

呼び出しを受けた時、荷風の脳裏をよぎったのは、まさにこの言葉だったが、支配人の口から発せられた言葉はまったく予期していなかった「フランス・リヨン出張所への異動を命ず」というものだった。何が何でもフランスに渡りたいと願っていた荷風にとって、この異動命令はまさに天から降って湧いた「朗報」以外の何ものでもなく、荷風は「感激極りて殆ど⁽²⁶⁾言う処を知らず」と歓喜する。

そして、この異動の裏に、常に厳しい態度で荷風に当たるものの、要所所で荷風の意向を汲んで助け舟を出してくれる父、久一郎の計らいがあったことを直感で悟るのだった。実際、この異動は久一郎が横濱正金銀行の相馬頭取に面会して頼み込んだもので、その意味において荷風は何から何まで父親の援護を受け続けた“お坊ちゃん”だったのである。

9. イデスとの恋物語は真実か、それとも虚構か

その1週間後の7月9日、荷風は嬉々としてイデスのアパートを訪れ、彼女とともにシャンペンでフランス転勤の祝杯を挙げている。そしてこの時、イデスは「私も旅費を工面して、冬になったらパリへ渡る。それからリヨンに行って、あなたと一緒に暮らしたい」と荷風に熱っぽく語ったという。それが彼女の口先だけの社交辞令だったのか、それとも荷風の創作だったのかは知る由もないが、いずれにせよ、これが2人にとって「今生の別れ」となる。

このように、イデスの荷風に対する女ごころには、爆発的に燃え上がる激しさと、ひた向きな純粹さが随所に窺える^{うかが}。しかし、彼女が性を売る職業婦人だったことを考えると、荷風との愛情関係にどれほどの真実性や信憑性があったのか、依然として闇の中というしかない。

もし、イデスの「フランスに行きたい」という言葉が事実であるとすれば、荷風はそれを一体、どのように受け止めたのだろうか。荷風にとってフランスは、誰にも邪魔されたくない絶対的な憧憬の地である。それだけに、このイデスとの^{とわ}永久の別れの後、荷風は「あゝ^{しか}然れども余の胸中には最早や藝術の功名心以外何物にもあらず」と真実を吐露している⁽²⁷⁾のである。

先に、ロザリンとの純愛が小説的虚構だった可能性について言及したが、このイデスの存在についても様々な見方がある。その最たるものは当時、西洋と東洋の間に横たわる根強い差別意識があったことを考えると、日誌に綿々と綴られた荷風に対するイデスのひたむきな愛情は信用し難いとい

うものである。

それに加えて、イデスは性を売って金銭を得るプロの娼婦であることから、日誌に書かれているような自己犠牲すら厭わ^{いと}ない真摯な愛情表現に違和感を抱くとの指摘もある。太田三郎もこの説の同調者で、「東洋の男は娼婦の世界でも低くみられる。白人の女の愛をうることは、たとえ相手が娼婦であろうと、当時日本人としては到底考えられ^{いと}ない」と分析している。

英国留学中、自身の低身長ゆえにコンプレックスに苛^{さいな}まれた漱石と違って、荷風は欧米人並に背丈があり、しかも眉目秀麗な青年だった。しかし、娼婦だったイデスが、荷風日誌にあるように献身的に荷風を気遣い、愛を告白し、結婚を決意するほど、本当に惜しめない愛を注いだのかとなると、やはり疑問符が付くといわざるを得ない。これについて、菅野昭正は「旅行者の感情や夢^とが、修辭的な誇張で拡大されてるのは間違いない。イデスが物語の女であるのに見あうようにして、イデスの情人としての『余』も小説の男に仕立て⁽²⁸⁾られている」と考察している。

実際、日誌というものは相手に関係なく、自身に都合良く書くことができるうえ、たとえそれが作為的な架空話であっても、第三者がそれを実証することは極めて難しい。それ故、荷風は自身のアメリカ物語をより感動的に、そしてより魅力的なものにするために、『あめりか物語』とは別に、恣意的な加工を施した『日誌』を書き残したと考えることも可能なのである。

そのように考えると、遊ぶのに十分なお金を持ち合わせていない一介の若き放浪日本人に対して、ワシントンのプロの娼婦がニューヨークにまで追い掛けて来たり、「私もフランスに行きたい」「結婚したい」といった純愛まがいのシーンが登場することは、確かに違和感を禁じ得ない。当時の日米の貧富の差、あるいは黄色人種に対する差別意識などを考えると、出来過ぎている観は否めないのである。

事実は小説よりも奇なるところがあり、個人的な男女間の愛情関係を一般的常識で推し量ることは出来ない。しかし、荷風のアメリカ滞在の重要

な核としてのイデスと荷風の愛欲関係が、日誌『西遊日誌抄』において微に入り細を穿^{うが}って書かれており、『ふらんす物語』でもその存在を暗示する記述があるのに、『あめりか物語』にまったく取り上げられていないということも大きな謎である。

そこで、浮上するのが、荷風はモーパッサン流の宿命的な悲恋物語を、「日誌」という形で小説的に創作したのではないかという疑念である。もちろん、イデスがまったく架空の人物だったというのではなく、荷風が実際に関係を持った娼婦をモデルにして、それに様々な脚色を施し、実在したかのように「物語化」したのではないのかというものである。

このイデス問題を追究してきた野口富士男は、これまで実在の根拠と信じてきた『西遊日誌抄』と『ふらんす物語』に収録されている『雲』（『放蕩』の改題）を詳細に比較検証した結果、次のような結論に達したという。

「ほんらい小説はつくり物語であり、虚構であってみれば、現実ないし素材を美化し、一を十にふくらませることはあり得るとしてもなお、イデスが実在の人物であれば、『雲』のなかでイデスに擬せられているアアマがあれほど理想化されることはあるまい⁽²⁹⁾」。つまり、両資料の分析から、イデスは架空の人物である可能性が極めて強いと断じているのである。

それに加えて、野口は筆者と同様、「荷風は愛に燃え、恋におぼれるといったタイプの人間だとは考えられないので、イデスとの交情にはどこか彼らしからぬものが感じられる。ひょっとすると、渡米に八ヵ月先立って辱知を得た森鷗外の『舞姫』を読んだはての妄想ではなかったのか」と推理⁽³⁰⁾している。

実際、『西遊日誌抄』は紀行日記の形態をとっているが、そこには死の直前まで書き続けた『断腸亭日乗』と同様、後の公表を前提にした巧みな修辞や誇張、虚構の形跡が随所に認められる。それ故、日誌であっても、そこに書かれたことを額面どおり事実と受け取るのは早計だろう。荷風が得意とする虚実入り乱れた巧みな創作手法を考えると、戦後に発見されたとされる荷風のイデス宛書簡の信憑性にも疑問を呈さざるを得ない。つま

り、小説世界がすべてと信じて疑わない荷風にとって、架空を事実と偽装することなどお手の物だったに違いないからである。

そのような観点から、荷風がイデスと別れる際、まるでメロドラマを演じているかのように「余は宛然仏蘭西小説中の人物になりたるが如く」と告白している点は注目に値するかもしれない。⁽²⁰⁾何故なら、事実に基づく日記を書いているのに、図らずもこのシーンが小説的創作だったと漏らしてしまった可能性、つまり虚構の傍証と考えることも不可能ではないのである。

そして、荷風が描いたイデスとロザリンの物語が、男女が濃蜜な恋愛感情によって結ばれながらも、宿命的な障害によって悲哀と絶望の淵に立たされ、最後には破滅に至るというモーパッサンの世界との酷似を指摘しておかなければならない。つまり、荷風のアメリカ滞在とその後のフランスへの渡航、そして読者の心を揺さぶる感動的な仕掛けとして、彼女たちとの哀切極まりない別離が設定されていたと考えても不思議ではないのである。

10. フランスに対するアンチテーゼとしての「アメリカ像」

結局、荷風のアメリカ滞在は3年9ヵ月間に及び、後に渡航したフランスにおけるリヨン滞在8ヵ月、パリ滞在2ヵ月と比べてもはるかに長い期間だった。フランスに憧れるあまり、アメリカ滞在中は地に足が着いていなかったとされるが、その一方で荷風は何ものにも束縛されない「自由人」の立場からアメリカを冷徹に観察している。

「^{ニューヨークシカゴ}紐育市俄古あたり繁華な都会でも、普通の人の生活は決して奢侈贅沢と云ふ程の事は有ません」「寧ろ質素で毎日殆ど同じ料理を食べて居るやうでした」といった率直な感想は、西洋の優位性を殊更、誇張する傾向にあったエリート国費留学生のそれとは趣を異にするものだった。^{おもむき}

とはいっても、滞米中の荷風の頭を支配していたのは常に「フランス」

だったことから、彼の目に投影されたアメリカは芸術文化国家としてのフランスと比較した相対的なものだったといえる。その意味において、封建的権威主義の欧州に反発して大西洋を渡り、この大陸で新しい価値体系の民衆社会を実現した「フロンティア国家」の真髓に迫ることはなかったといえるかもしれない。

それに加えて、荷風は父親の差配で忌み嫌う銀行で働かされたということもあり、実利追求の資本主義的側面ばかりが目について、それを「非文化的」として蔑む^{さげす}という偏った^{かたよ}アメリカ像を抱く結果となった。つまり、フランスを芸術文化の理想郷として美化し、礼讃していたことへのアンチテーゼとしてのアメリカ観だったのである。

この点について、未延芳晴は「(荷風は)『アメリカは今、わが第二の故郷となった』(「六月の夜の夢」とまでアメリカを深く受け入れたのにもかかわらず、恋人イデスの肉体と聖少女ロザリンの愛を振り切って、フランスに渡ってきたのも、ひとえにフランスの自然や風景、都市と文化、そしてフランス人の生活の中でフランス文学を学びたいという一念によるものだった」と同様の⁽³¹⁾見解を示している。

青年期から落語や芝居、絵画、歌舞伎などに親しんだほか、人間の条理^{えい}を抉る文学に傾倒していた荷風が、アメリカの実利の追求より芳醇な芸術文化の香りが漂うフランスに共鳴したのは当然の帰結であった。

しかし、荷風の父、久一郎は一高から帝大への進学、高級官僚としての立身出世、さらに実業界における栄達を社会的上位観念として信じて疑わず、それを荷風に強要しようとした。彼にとっては、荷風が情熱を傾けていた文学など芸術文化は下位観念でしかなかったわけで、そのような人生観^{そこ}の齟齬が父子関係を引き裂く決定的要因となったのである。

荷風は1907年(明治40)7月18日午前9時、フランス船「ブルターニュ号」でニューヨークを出航し、9日間の船旅を経て同月27日午後10時、フランス北部西岸の港町ル・アーブルに入港している。胸を焦がし続けた憧れのフランスへの上陸である。

この後、フランス滞在を経て翌1908年(明治41)7月に帰国し、その直後の8月に『あめりか物語』を博文館から刊行する。アメリカ滞在中のタコマやニューヨーク、ワシントンなどでの生活体験やアメリカ的家族観、さらに当地で喚起された日本人としての自己発見など、多岐にわたる主題が紀行文や短編小説、評論として綴られている。

そこには、世界最先端をいく近代国家アメリカの姿が映像でも見るかのように、鮮やかな筆致で描かれ、キリスト教が社会や家庭の隅々にまで浸透していること、親子であってもそれぞれの権利を尊重し合っていることなどに驚きの眼差しを向けている。久一郎による強権的な家族支配が荷風にとって強迫観念になっていただけに、アメリカで目の当たりにした和氣藹々としたファミリーの存在は羨望的でもあった。

また、明治の日本では不道徳として社会の厳しい目に晒されていた男女間の恋愛がオープンで、恋人たちが家族の前でも平気で抱擁をするなど、自由奔放に振る舞っていたことにも感嘆している。日本では、このような女性は論語を手にした学者から「色情狂」と言われるに違いないと皮肉り、「あゝ、^{さいはひ}幸なるかな、自由の国に生れた人よ」と羨ましがっている⁽³²⁾。その一方で、黒人に対する白人社会の^{ひど}酷い差別や、渡米した日本人出稼ぎ労働者たちの悲惨さわまりない生活実感なども赤裸々に描いている。

このように、明治の日本人が^{うかが}窺い知ることのなかった「アメリカの素顔」を、荷風は作家特有の鋭い目で浮き彫りにした。当時、西洋化あるいは近代化といえ、国家的観点から科学技術や富国強兵に焦点が当てられることが多かったが、『あめりか物語』は主人公がしがらみのない「個人」としてその社会に入り込み、現地の人々と同じように日常生活を営みながらレポートするという点において、類例のないジャーナリスティックな新しいスタイルの「新婦朝者報告」となったのである。

その新奇性ゆえに、『あめりか物語』は刊行と同時に爆発的な人気を呼ぶことになるが、その一方で、“善意の虚構”ともいべき荷風独特の創作技法が威力を発揮したことも忘れてはならない。つまり、イデスやロザ

リンの項で述べてきたように、荷風の作品には事実と虚構を巧みに融合させて物語化する小説技法が取り入れられており、それが随所で刺激的なエッセンスとなって、読者を感動の世界に誘ったのである。

11. 硬質な自我をもった荷風の奔放で刹那的な女性観

『あめりか物語』には登場していないものの、荷風のアメリカ滞在はイデスの存在を抜きにしては語れない。その実在性については既述のように疑問もあるが、荷風文学の真髄ともいえるべき「女性」に対する考え方は、その日誌にしばしば登場するイデスとの関係に余すところなく反映されている。また、慶應義塾の教授に就任した後も人目を憚ることなく私娼窟に入り浸ったり、芸者やカフェの女給、踊り子といった女性たちと情交を重ねた荷風の女性観の原点を、そこから読み取ることができるのである。

荷風は男女の恋愛感情にあまり興味がなく、肉欲的な情交に強い関心を抱いていたと言われる。つまり、荷風の女性観の根底には女性を「性的なモノ」と考えていたフシがあり、プラトニックな純愛は対象外だった。それ故、荷風は女性とどれほど深い関係を持って、決してそれに耽溺することなく、常に相手と一定の距離を置く冷静さを持っていた。

そして最後に、それら関係を持った女性たちと破局を迎えて、必ず別れることになる。そのことを斟酌すると、荷風は最初から「捨てる」ことを前提にして、女性と情交を重ねていたとも考えられる。このような“刹那的な関係”は、イデスとの間においても然りであった。

荷風の女性関係は彩り鮮やかで、それが荷風小説の重要な糧^{かて}になっている。しかし、実生活においては、どの女性ともその関係を成就させたことはない。結局、荷風は芸者との短期間の結婚(同棲)を除いて、モーパッサンと同様、事実上、生涯独身を貫くことになるのである。

荷風の言葉を借りれば、「自分は恋を欲する、が、其の恋の成就するよりは、寧ろ、失敗せん事を願つて居る。恋は成ると共に烟^{けむり}の如く消えて了^{しま}す」

ふものであれば、自分は、得がたい恋、失^{うしな}へる恋によつて、僅^{わづか}に一生涯をば、まことの恋の夢^{あか}に明^{しま}して⁽³³⁾了⁽³³⁾りたい」ということになる。

このような荷風の女性観について、磯田光一は「荷風が、交情を結ぶ女性をおおむね“玄人”に局限していたのは、共同体の粘着力にたいする気質的な嫌悪に根ざして、あえて誤解を怖れずにいうならば、“売春”およびスタンダールのいう“趣味恋愛”だけが、荷風の気質と生活理念によって容認できる男女関係の形であり、それだけが、荷風の過激な“近代性”に合致していたのではないか」と考察⁽³⁴⁾する。いずれにせよ、荷風の自由奔放で刹那的な女性観が、彼の文学作品に寂寥感や虚無的な悲哀感を滲ませ、独特の世界を醸成することになったことは疑うべくもない。

その一方で、このような荷風の特異な女性観の背景として、複雑な家庭事情を考慮する必要があるかもしれない。つまり、次から次へと女色を漁る放蕩的行為は、人間の自由を縛る倫理的な社会規範に対する反抗、それは荷風がゾラに傾倒した理由でもあるが、家庭内で絶対的権力を振るう父親に対する反発が背景にあったと考えられる。

それに加えて、荷風は裕福な名家の跡取り息子として、何不自由なく大事に育てられているが、母親は強権を振るう夫^{かしず}に傳^かただけで、まったく無抵抗な存在だった。それについて、荷風は「四書五経で暖い人間自然の血を冷却された父親、女今川と婦女庭訓で手足を縛られた母親。音楽や笑声なぞの起りやうはない」「^{だうあく}瘠^た悪^たな専制的な父の顔、唯だ諾々盲従して居る悲し気な、無気力な母親の顔」「自分は子供心ながら、世に父親ほど憎いものはないと思つたと同時に、母親^{ほど}程不幸なものも有るまいと信じた」と複雑な家庭事情を暴露⁽³⁵⁾している。

つまり、無力な母親は父親の横暴から子供を守る盾に成り得ず、恨みとは言わないまでも、荷風にとってはそれが「母性」に対する不信となっていた。そのことが、荷風の自意識から意図的に「母性」を排除しようとしたのではなかったか。実際、荷風作品に登場する女性像には、妻や母といったイメージがことごとく欠落しているのである。

荷風は「此の野蛮な儒教時代も早晚過去の夢となり、吾等^{われら}の新しい時代は遠からず凱歌^{がい}の声を揚げるであらう」と未来に一筋の光明を見出そうとするが、それが叶うことはなかった。父親が死に瀕している時に芸者と泊まり込んでいたり、その後、実弟との絶縁、さらに母親とも諍^{いさか}いを起こして、長男であるにも拘わらず葬儀を欠席している。荷風の心の闇は、その作品からは覗い知れぬほど深かったのである。

荷風の特異な女性観にはこのような背景があったわけだが、彼の文学作品がどれほど高く評価されても、社会的倫理規範を超越^{ほうらつ}した放埒な女性関係に対して、文壇や世間の目は終始、冷たかった。しかし、そのような荷風について、桑原武夫は「硬質な自我を持っており、太宰治のような破滅性はどこにもない」と、その行状の奥に堅固な人間的座標軸が存在したことを看破している。つまり、荷風は決して自堕落ではなく、いつも冷徹な意識を持っており、どれだけ肉欲に埋没しても自我を忘却することはなかったと考える。そして、一見して風来坊のように見えても、実はしっかりと自己管理が出来る人間だったと分析しているのである。

いずれにせよ、荷風がその生涯を通して娼婦や芸者たちをこよなく愛したのは事実である。そして、荷風がどれほど高名を得ても、彼女たちの世界にまるで鶴^{ねえ}のように溶け込み、仲間意識はあっても決して差別感情を抱くことがなかったことは、特筆に値するのではないだろうか。そのような観点において、荷風は精神的な意味における“娼婦”，つまり究極の自由人だったといえるかもしれない。だからこそ、既成の倫理観という社会的垣根を越えて彼女たちと懇ろ^{ねんご}になり、生涯を通して愛され続けたのである。

引用・参考文献

- (1) 『荷風全集 第五巻 ふらんす物語』「船と車」、永井壮吉著、岩波書店、1992、12頁。
- (2) 『荷風全集 第四巻 あめりか物語』「西遊日誌抄」、永井壮吉著、岩波書店、1992、300頁。
- (3) 同、304頁。
- (4) 『荷風全集 第四巻 あめりか物語』「旧恨」、永井壮吉著、岩波書店、1992、

- 126頁。
- (5) 『荷風全集 第四卷 あめりか物語』「西遊日誌抄」, 永井壮吉著, 岩波書店, 1992, 308頁。
- (6) 同, 309頁。
- (7) 『荷風全集 第四卷 あめりか物語』「夏の海」, 永井壮吉著, 岩波書店, 1992, 217頁。
- (8) 『荷風全集 第四卷 あめりか物語』「林間」, 永井壮吉著, 岩波書店, 1992, 99頁。
- (9) 『摘録 断腸亭日乗 (下)』永井荷風著, 磯田光一編, 岩波書店, 1987, 159頁。
- (10) 同, 145頁。
- (11) 同, 274頁。
- (12) 『荷風全集 第四卷 あめりか物語』「西遊日誌抄」, 永井壮吉著, 岩波書店, 1992, 310頁。
- (13) 同, 312頁。
- (14) 同, 313頁。
- (15) 同, 313～314頁。
- (16) 同, 314頁。
- (17) 同, 317頁。
- (18) 同, 323頁。
- (19) 同, 324頁。
- (20) 同, 325頁。
- (21) 同, 326頁。
- (22) 同, 335頁。
- (23) 同, 327頁。
- (24) 同, 330頁。
- (25) 『永井荷風巡歴』「恋する旅行者」, 菅野昭正, 岩波書店, 2009, 113頁。
- (26) 『荷風全集 第四卷 あめりか物語』「西遊日誌抄」, 永井壮吉著, 岩波書店, 1992, 337～338頁。
- (27) 同, 338頁。
- (28) 『永井荷風巡歴』「歓楽と恐怖のあいだで」, 菅野昭正, 岩波書店, 2009, 119頁。
- (29) 『わが荷風』「深川と深川の間」, 野口富士男著, 講談社, 2002, 78～79頁。
- (30) 同, 79頁。
- (31) 「国文学 解釈と鑑賞 特集 永井荷風を読む」(859 平成14年12月号)「『あめりか物語』から『ふらんす物語』へ」, 未延芳晴著, 至文堂, 2002, 86頁。

- (32) 『荷風全集 第四巻 あめりか物語』「市俄古の二日」, 永井壮吉著, 岩波書店, 1992, 203頁。
- (33) 『荷風全集 第四巻 あめりか物語』「六月の夜の夢」, 永井壮吉著, 岩波書店, 1992, 270頁。
- (34) 『永井荷風』「第二章 もう一つの西洋」, 磯田光一著, 講談社, 1989, 68頁。
- (35) 『荷風全集 第四巻 あめりか物語』「市俄古の二日」, 永井壮吉著, 岩波書店, 1992, 204頁。
- (36) 同, 205頁。